

こっせつにゆういんてんまつき 骨折入院顛末記

▽渡邊晴代

ぬくもりほつとらいん名誉理事長
カウンセラー

夜半の出来事

それは9月25日の夜の11時、散歩から帰った上着を、壁のフックにかけようとして手を伸ばした時に起こった。玄関の格子戸のガラスがガチャンと割れて、尻餅ついた私は立てなくなった。右足の付け根がすごく痛くて右足全体が動かなくなっていた。足を踏み外したのがわかったのは後からだ。た

出迎えてくれた。何枚かレントゲンを撮ると、医者は背骨の圧迫骨折が2箇所、恥骨の骨折と3箇所の骨折があると告げた。

「あくあ、やつちやつた！今まで骨を折ったこと一度もなかったのに！」

ナースコール

骨折で動けない患者にとってナースコールは命綱だ。体の向きを変え、車椅子に乗るときも、ベッドから落としたものを拾ってもらう時も、ナースコールを押してやって貰わなくてはならない。大・小のことも心苦しいお願いだ。「どうしました？」と駆けつけてくれる時は本当にありがたい。しかし多くの患者が同時にナースを呼ぶのだから、待たされることもある。そんなとき苛立つて文句を言う人もあれば、何度も何度も押し続ける人もいる。

骨折で動けない患者にとってナースコールは命綱だ。体の向きを変え、車椅子に乗るときも、ベッドから落としたものを拾ってもらう時も、ナースコールを押してやって貰わなくてはならない。大・小のことも心苦しいお願いだ。「どうしました？」と駆けつけてくれる時は本当にありがたい。しかし多くの患者が同時にナースを呼ぶのだから、待たされることもある。そんなとき苛立つて文句を言う人もあれば、何度も何度も押し続ける人もいる。

「おとうさーん」

夜の9時に面会時間の終了が告げられ、(コロナのせいで一般の面会は禁止になっていたが、家族は短時間に限り許されていた)そろそろ部屋ごとに消灯がされ、静かになってくると、大声で叫ぶ人がいる。

「何かあったら、また呼んでくださいね」この言葉にどんなに励まされたことか！

まるで子犬のように妻を呼んでいい。 「かゆいよー、我慢できないよー」と男性の声。

女性の声も每晚だ。この人は昼間はナースステーションの前で車椅子に座って、行き交う人の顔を確認するように見つめている人だ。私が会釈をすると、かすかに微笑みを返してくれることもある。夜になると誰かを呼ぶ。一番多いのはお父さんだ。

「おとうさーん」「おとうさーん」と絶え間なく何時間も続く。誰を呼んでいるのだろう。父親なのか、連れ合いなのか。病棟内に響き渡る哀しげな声を聞きながら、不本意に病を得て家庭から切り離されてベッドの上での生活を余儀なくされた私の心にも共鳴して、誰か絶対者に呼びかけたいような切ない気持ちになるのだった。

リハビリ

骨折はしたけれど私の場合は手術などはなく、リハビリと自然治療で治すという方針だ。勿論痛み止めの薬は処方された。リハビリを受けている人は骨折の人ばかりではなく、リュウ